

2025年度「神戸女学院の100冊」書評コンテスト 講評

毎年実施している「神戸女学院の100冊」書評コンテストに、今年度は2編の応募があり、各分野の専門の先生方による厳正な審査などを経て、2作品ともに優秀賞が授与されることになりました。残念ながら、今年度も最優秀賞に該当する作品はありませんでした。

文学部英文学科3年生吉田帰蝶さんは昨年度、マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885年)の書評で佳作を受賞されています。今年度は、ウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』を選び、昨年度に続き英文で書評を執筆されました。吉田さんは、冒頭で作品の要約を行った上で、作品中の重要な台詞をいくつか取り上げて、その意味するところを深く考察してゆかれます。そしてこの作品は、時代を超えて普遍的な愛の姿を描くだけでなく、個人を取り巻く社会の不条理さを読者に突きつけており(つまり単なる悲劇的結末を迎える愛の物語ではない)、それが詩的な言葉でつむがれることによって、今なお読者の共感が呼び起こされるのだと結論づけられます。名作ゆえに語り尽くされた感のある『ロミオとジュリエット』であり、新味のある評価を下すのは難しいですが、改めて作品の構成を丁寧にトレースして評価を導き出しているところに、好感を覚えました。

音楽学部音楽科1年生の井上姫歌さんは、アーサー・M・エーブル著／吉田幸弘訳『大作曲家が語る音楽の創造と靈感』(出版館ブック・クラブ、2013年)を取り上げられました。著者のアーサー・M・エーブルは、19世紀後半から20世紀前半にかけて活躍した音楽雑誌の記者です(従って本書も刊行からすでに半世紀以上が経過しています)。原題は"Talks with Great Composers"であり、そのタイトル通り、ブラームス、リヒャルト・シュトラウス、プッチーニ、フンパーディング、ブルッフ、グリーグという6人の著名な作曲家との対談をもとに書かれています。なお、「靈感」という言葉は、本書においては自然から受けるインスピレーションというような意味で用いられています。井上さんは、6人の作曲家が何からどのようなインスピレーションを得て、どのような楽曲を生み出したのかを、本書の内容に即して整理し、楽曲が生み出される過程、そこに介在する思想、信仰、そして苦悩の跡を読み取っていられます。井上さんの筆致には、楽曲が生み出される精神的プロセスに対する感動が素直に表現されており、1年生らしい爽やかさを感じる書評でした。

さて、書評コンテストに講評に当たって、さらに2点コメントをさせていただきます。

1つ目に、「書評」という営みそのものについてです。書評とは感想文ではなく、作品に内在する論理と著者の意図を汲み取り(実際に汲み取ることができるかどうかはともかく、汲み取ろうと努力し)、その意義を他者と批判的に共有しつつ、後世に引き継ごうとする学術的営みにほかなりません。昨年の講評でも述べたように、それには評者がそれなりの知性を備えていなければならず、それに必要なのは日頃の読書量です。スマートホンに生活を浸食され、読書と思索の時間が失われている現在において、書評という学術的営み自体が危機に瀕していることを、残念ながら実感せざるを得ないのが現状です。

2つ目に、この書評コンテストについてです。「神戸女学院の100冊」による書評コンテストは、今年度が最後となります。応募者は毎年数人にとどまり、最終回となる今年度も、応募者がたったの2人だけというのは淋しい限りでした。加えて、生成系AIが普及していくにつれて、今後書評そのもののあり方も変わってゆくのではないかと思っています。

それでも神戸女学院大学では、リベラル・アーツ教育の基本として、読むことと書くことを大切にしたいと考えており、そのための新たな方策を現在検討中です。常に本が1冊カバンの中に入っていて、バスや鉄道での移動中に、たまにはスマートホンではなく本を取り出して読んでみる——そんな、生活の一部に本があるような学生生活を、本学の学生のみなさんには送ってほしいと願っています。

2026年1月9日(金)

教務部長・文学部総合文化学科教授

河島 真